

女川から未来をひらく夏の文化祭2024報告



1 一人分の力を持ち寄ること

「女川のまなか 夏の最終日 みんなのみんなが交わり広がる 未来をひらく文化の祭り 手作りの祭り 言葉や笑顔交わしてぬくもりとか喜びとか大笑いとか こぢんまりとほっこりと ぜひごいっしょに」 概ねこのとおりになった。「こぢんまり」ではなかったところが予想外。台風の影響で遠方から参加予定だったたくさんの方から、参加できないお知らせが届いていたけれど、参加者およそ200人だった。

当日まで、本当におかげさまだった。グループの会報を郵送するときと同封してくれたところが複数あった。仲間に渡すからとちらし200枚引き受けてくれた人がいた。地元女川町と雄勝の新聞折込を提案してくれた実行委員さん。折込のタイミングを教えてくれた新聞店さん。女川小学校、女川中学校、女川高等学園の児童生徒職員にも配布してもらった。女川町の町内会で率先して個々のおうちに配ってくださった人が大勢。新聞でも取り

上げてもらった。それは取り上げてもらえるよう声をかけてくれた方のおかげさま。チラシを置いてくれたお店もたくさん。まさに、みんなで未来をひらく営みだった。ありがとうございました。

「未来をひらく」というと、まるでゴールを目指しているような感じがするかもしれない。けれども、きっとゴールはない。かといって、漂うわけでもない。ゴールで大輪の花がひらくのではなく、日々あちこちで小さな花が咲き、そして種を実らせ、それが芽吹くイメージ。大きな課題、たくさんの困難がある。けれど、たくさんの人が、ひとりひとりの知恵と大きくない力を合わせ続ける。ときどき集まり、勇気を分かち合う。そうすれば、人類はなんとかやっつけていける。たぶん太古からそんなふうに進んできたはずだ。

2 出演・展示報告

ステージ①【竹浦獅子振り】

写真集「女川海物語」（小岩勉 カタツムリ社 1992年）には、1988年から1991年の女川が在る。p110-115は「獅子振りの日」。竹浦の写真。小岩勉さんによる、あとがきの中から一部を抜粋して紹介したい。

正月の獅子舞に付いて、一日中浜の家々をまわった。

「女の子はとくにそうだけど、いつかこの浜を出ていくわけだよ、嫁さんになってさ。そんなときせめて笛の一本も持って行ってもらおうって…、遠くにいてもこの浜を忘れないでほしいって思っただけ」

こどもたちに獅子舞を教えているひとが話してくれた。男の子には獅子と太鼓を、女の子には笛をと、三年前から始めたのだった。

小学生から高校生、さらに、二十代を始めとするおとなたちが、一緒になって演じ、その周りをもっと小さなこどもたちが駆けまわると、だれもが決して無関係ではいられない、こころ躍るものだった。技術や豪華さ、あるいは貴重な文化財などというものからいっさい離れ、それは、あらゆる世代が存在をたしかめ合うために続けられているように思えた。本当の文化とは、こういうものなのかもしれない、とも。（「女川海物語」（小岩勉カタツムリ社 1992年）あとがきより抜粋）

2017年の第1回「女川から未来をひらく夏の文化祭」から毎回オープニングは竹浦獅子振り。7年前に小さかった子が、おとなと同じ背丈になっていて、私はほくほくと嬉しい気持ちになる。私は、竹浦獅子振りのファンであるとともに、竹浦のみなさんに憧れている。小岩さんが撮影した「獅子振りの日」から30年以上の年月を経て、竹浦獅子振りはずますます輝かしい。7年前どころか、30年前の「小さなこどもたち」が胸張っている姿。

そして、どこか遠い町の部屋の中に大切に在る笛を思う。

獅子が登場する。満員の席の後ろのほうに、絵を描くテーブルがある。その下には、獅子から逃れるちいさい子がお母さんの脚につかまっている。去年は獅子を怖れて隠れていた人が、今年は席に着いていて、なんと獅子に噛まれている！ ひゃー成長したねえ！

太鼓と笛、獅子。その現場がここにあるということ。ふるさと。地元。その誇り。誇りとは、まず感じるもの。教えられるものではない。暮らしと共にあり、奪われないもの。この輝きは、たぶん竹浦だけのものではない。どの集落でも、どの国のどの村にも、きっと在る。人の歴史を、大きくいばっていない足跡を、私は大切にしていきたいと、今日もあらためて感じた。演舞の最後は、いちばんちいさな女の子の口上だった。さすが、竹浦。

ステージ②【ぼたもち堂】

ジャグリング「ぼたもち堂」さん。余計な力が入らないしなやかさ。そのしなやかさゆえに、いろんな人とやわらかく交わっていて、素晴らしいなあと思う。

ジャグリングは、きっとセンスが大切だと思う。けれども、それ以上に努力がある。20年続けていて、この頃できたんですっていう技を見る。すごいなあ。お客さんの注目するその表情が、「ぼたもち堂」さんすごさを映している。ああ、私が小さなこどもだった頃、おじいちゃんおばあちゃんと木下大サーカスを見に行ったことがあった。テレビではなく、ここで起きていること！ 観るという体験の大きさを思い出す。

ステージ③【お絵描きつっちー】

「女川から未来をひらく夏の文化祭」実行委員の齋藤みや子さんのオカリナ演奏から。オカリナを練習しているということだったので、みんなの前でやりましょうと誘った。い

つもはきはきしているみや子さんなんだけど、一層輝いていた。誘ってよかった。

「お絵描きつっちー」は、おしゃべりから。獅子振りやジャグリングは、稽古重ねたうえでのすごいこと。でも、すごいことだけのステージじゃなくて、いろんな人が交わる文化祭にしたい。私は、絵を描くのは大勢の前で緊張なく気持ちよくできるんだけど、音楽はいつもドキドキ。いきいきと歌える人に憧れている。か全部オリジナルなんだけど、作曲とか作詞とか、そんなほどではない。みなさんも（こんなだったら、私もできる）って思ってもらえたらいいな。

「鍋布団ワークショップ」のこと、あいこープさんにお知らせしてもらった。お振舞いのカレー一口どうぞ。お客さんかたくさんいるって、すごいことだと思った。声援あると走り続けるマラソン大会を思い出した。

ステージ④【brother（ふるちゃん&さんちゃん）】

チラシをもっているんなところを回った。するとそれはそれはあちこちで「brother（ふるちゃん&さんちゃん）」ファンがたくさんいて、すごかった！ 道の駅で「彼らのファンなんです！」と若い女性が目を輝かせていた。雄勝公民館で移動児童館事業でこどものみなさんと遊んだとき、私のギターいじって「さんちゃんとおんなじ音だ」って、文化祭のこと言っていないのにつぶやく小さい子。昨日の女川でも「brotherさんにはお世話になりました」って聞いて、地域に根ざすってこういうことだって学んだ。すごい。

安定のギターデュオ。これまできつといるんなリクエストに応じてきたんだろうなあと思う。浜の先輩に可愛がられ、若い皆さんに憧れられている、そんな存在、そんな星。眩しい。

「アンコール！」という声。「追分温泉」オリジナル。いい歌。追分温泉と聞いて、ドキドキした。渋谷修治さんを思った。2022年に亡くなったことがまだよく理解できていな

い。石巻「鳥の歌」公演でも歌ってもらった渋谷さん。次の世代のシンカーソングライターが雄勝にいるんですよと、機会があったら渋谷さんに伝えたい。

ステージ⑤【江島 法印神楽保存会】

江島（えのしま）は、女川町にある島だ。太平洋の小島だから、女川港からの船で訪れるときは、外海のうねりのむこうにある。私は、出島（いずしま）を訪れる途中で船が寄ったときの江島しか知らない。一度訪れなくてはならないと思っている。出島には2024年12月に橋が掛かる。すると江島は、今まで以上に太平洋にポツンと小島ってなりそうに思う。

「江島 法印神楽保存会」の演舞に、説明書きは用意していない。観客のみなさんは、たくさんのかんじ考へて注目する。お面を被っているから、なおさらにかんじ、考へる。言葉は、セリフではない。だから、それも手掛かりになるけれど、想像力を働かせる。戦いがあり、そして、お面が置かれる。刀がどこにどのようになるかに、目を見開く人のなんと多いことか。お面が目前に来たとき、小さな子が直視できず、目を落とした。太鼓と笛が、物語を舞わせる。演舞終えたときの、ため息前のような静けさがとても印象的だ。ああ、祈りの現場だったのだ。

ステージ⑥【ミーオカー】

「ミーオカー」は、タイ北部ランナー地方の楽器と踊りを披露する。神楽の太鼓の空気から、タイの音に。音は、空気を振るわせて届く。震わせた空気だらけになる。震わせているのは、耳だけではなく、身体全部だから、その音に私たちは包まれる。金属の音は、皮の音とは異なる形をしている。みなもの波紋。水平なみなもではなく、90度回転した水直なみなもが揺れる。洞窟の中のような、それでいて閉鎖どころか広がり続ける感覚に身を置く。

昨年「ミーオカー」に楽器に触れる機会も作ってもらった。お客さんに気をつけてもらうことはありませんかと尋ねた。すると「跨ぐことはしないでくださいね」というお話だった。「かみさまがいますから」と明るくにこやかに。なるほどと思った。それは「かみさま」でなくても同じかもしれないと気づいた。跨いでいいものはなかなかない。尊ぶということ。そして、日常の私はどうだろうかと省みた。儀式とか形式とかじゃなくて、尊ぶということ。大切にすること。それは、大切にされることにつながる。

女川町には、日本語使用者じゃない方々が暮らしている。水産業に従事する住民。水産業は、船に乗るだけでなく、加工などもある。インドネシアなどから実習に来ている女川の住民。数年前から、多言語の町表示について行政や議会に関わる人に伝えたりしている。小さい町だから、町全部のことを進めるのにはフットワークはきっと軽い。日本語使用者が他国を訪れたときに日本語表記を見つけたら、きっとほっとする。また訪れる気持ちになるかもしれない。それを女川ですということ。自分の言語が表記されている町は、新しいふるさとになり得る。

「ミーオカー」を、タイの人と一緒に女川で楽しむことを夢見る。人と人が交わる場を設けること。そこで人と人が出会い、分かり合う。発見をする。「ミーオカー」はタイ語でチャンス・機会があるという意味。ミーオカーを広げていきたい。

ステージ⑦【グリーンハート】

チラシでは「グリーンハート」は「仙台在住の夫婦ユニットです」と書いてあるんだけど、「ファミリーユニット」という認識がある。息子さんの存在が大きいのだ。今日の彼は、始めときはロビーに逃れ、それから席に戻って聴いていた。2019年「女川から未来をひらく夏の文化祭」では、マイクを離さないボーカリストだった。成長を感じる。にこに

こと聴いている姿こみこみで「グリーンハート」。

ステージでの夫婦二人の掛け合いも、いいんだな。あうんの呼吸じゃない、間合いがとても幸せ。ステージ以外でもきっとこんな感じなのねという距離感に、聞き手は安心して、身を委ねることができる。「おむすびころりん」の歌を今回も聴けて嬉しかった。お二人言っていたように名曲。

ステージ⑧【やたけたくとうた】

「やたけたくとうた」は、親子ユニット。ユーモア、冒険、広い世界。それでいて、身近な日常の中の発見。そんな、リズムカルな空気が漂う。テーブルに、いろんな楽器が並ぶ。鼻笛の二人のやりとりは、音はあるんだけどパントマイムを見ているような解放的な集中を呼ぶ。綿密な台本があるわけじゃない、もともとの距離感の呼吸具合なんだね。物語というより、詩な感じ。ああ、大好き。

ギターと歌とパーカッション。「女川小学校校歌」を聴く。うたさんの声が沁みる。って感じたのは私だけじゃなくて、ハンカチを使う人がいる。終演後もたくさんの方から「校歌でこんなに泣くとは」と伝えられた。人の心を動かすことができる、うたさんの歌。歌のうたさん。

「すごく緊張する！」って、出番の前にロビーでスティックでスネアドラムを連打していた。「友だちに来てほしいんだけど、来てほしくないような気もする、けど来てほしい」と話していた。さて、ステージに立つと、涼しげな表情で堂々としていた。たくさんのお客さんがそれを見守る。昨年もステージを見た方は（あら、背が伸びたね）と感じたかもしれない。昨年は、屋外マイクでたくさん呼び込みアナウンスをしていたけれど、今年はやらないという。ま、この変化が成長ってやつね。知っている人、見守る人が、たくさんいることはありがたいと思う。「この前、文化祭見たよ。よかったよ」なんて言われること、きっとあるんじゃないかな。

展示【原発のまち 50年のかお】

女川町は東日本大震災の津波で大きな被害を受けた。たくさんのが波にさらわれた。仙台で残っていた震災前の写真が見つかり、これは展示する機会があったらいいと思った。女川に原発ができる前の写真。原発建設に反対する町中のみなさんの様子。インクジェットプリンターで印刷してラミネーターで保護した。「女川から未来をひらく夏の文化祭2017」のときから展示している。展示がきっかけになり『原発のまち50年のかお：女川から未来を考える』（阿部美紀子編 一葉社 2022年）として出版された。

今回も、写真を指さしてしゃべっている方がたくさんいた。原発がなかったときのことを思う想像力は、いつも携えていたと思う。

ワークショップ【なべぶとん】

鍋の布団作りのワークショップ。ガスなどで加熱した後、それを布団の中で保温し、じわりと保温する調理をするためのお布団を、縫って作るというワークショップ。あいこープのみなさんにお手伝いいただいて進めることができた。調理室でカレーライスを作り、多目的室で裁縫をする。できた布団で鍋を保温して、カレーライスの試食をするというもの。事前にたくさん申し込みがあったけれど、当日になって参加者が増えた。大盛況のワークショップとなった。

嬉しそうに、鍋布団を抱き抱えて、スキップで帰る人を見た。いいなあって思った。作るのっていいよね。しかもみんなで縫うのって、最高だよ。

ワークショップ【石に絵を描く・紙に絵を描く】

再スタート2年目にあたり、ホールの中でできることを広げたいと考えた。ステージを妨げる音を出さなくて、場所を大きく占めないもの…で、描画ワークショップを考えた。ただ紙と画材だけあっても、引力が足りな

い。やりたい気持ちを喚起させるにも、音響・撮影・運営一般をやっている私が描画ファシリテーターをすることは難しい。となると、魅力ある素材だな。ということで、石。女川・小乗、雄勝・波板、気仙沼・登米沢海岸で、少しずついただいた石を準備した。水彩絵の具ではうまく着色できないから、アクリル絵の具。でも、周囲を汚す心配があるので、ポスカとクレヨンも用意した。

やっぱりだった。やっぱり石の魅力。石の存在感。触るということ。重さがあるということ。全部ちがうということ。「紙に絵を描く」のはどこですか？と、一度尋ねられた。同じ場所で紙を用意していた。紙より、石だった。無心に描けるんだよねと、何人もの方から聞く。「音楽聴きながらってのもいいのよ」って。なるほど。

当初は予定していなかったけれど、【桜猫】の展示、【きらきら発電】の展示もあった。

3 これから

女川町は、原発のある町。小さなこの町には「原発がない方がいい」と思う人も「原発がなくては仕事がどうにもならない」と言う人もいる。反対・賛成で割り切れない年月が、長いこと流れているのだと、よそ者の私は思う。「～派」という言い方で見切ってしまう、互いに出会えなくなることを、私は望まない。

この町にこんな分断を持ち込んできたのは地元の人ではない。ここをふるさととしなない、巨大な暴力。金をやるとかやらないとか、仕事をやるとかやらないとか。ピンチもセットで揺さぶる奴らの横暴。そういうものに生活を支えられている地元の人もいるだろう。けれど、この町の隣人を敵にし合わないためのことを、よそ者の私はなんとかしたいと思っている。馴れ合いとか和解とか、なんかそういうのではなく、人の顔をしていて大丈夫な何かということ。分断に抗するために

は対話しかないから、排除や論破や隔絶ではない、ちゃんとけんかしたり仲直りしたりできる未来を築きたい。私はよそ者なんだけど、責任もって活動する。あきらめない。

2014年8月10日は「加藤登紀子トーク&ライブwith小出裕章」（女川町総合体育館）だった。あの日も台風だった。たくさんの方が集った。あれから10年になる。

もう2025年「女川から未来をひらく夏の文化祭」への出演申し込みがあった。ますますたくさんのひとりひとりがひとり分の花を持ち寄る、そんな文化祭をつくっていただけたらと思っている。あなたも、ぜひ。

(土屋聡)

女川から未来をひらく夏の文化祭2024

2024年8月31日(土)10:00-16:00

女川町まちなか交流館

宮城県牡鹿郡女川町女川2丁目65番地2

主催：女川から未来をひらく夏の文化祭実行委員会（代表・阿部美紀子）

女川から未来をひらく夏の文化祭実行委員会

Facebook

<https://www.facebook.com/onagawamirai20170820/>